

呑
ま
れ
溺
び
て
酔
う
恋
は



——人間って、本当に重い。

勘右衛門は深く息を吸い腹に力を入れると、己が首の後ろに回させた腕を今一度引き寄せ直した。気合いを入れて足を踏み出せば、肩を貸した青年も引きずられるように前進する。だがその動作に本人の意思はなく、故に一步進むごとに重心がぶれ歩きづらいことこの上ない。

体幹は割合しっかりしている方だと思うが、運動部の連中のように鍛えているわけでもないのだ。ほぼ意識のない成人男性を支えて歩くのはさすがに骨が折れる。

「……ちゃんと歩けよな、も〜」

よたよたと歩きながら不満を垂れる。背後の男は言語ながらも定かではない音をもにやもにやと零すだけだ。それでも、首に回した彼の腕を勘右衛門が放すことはない。

この春順当に三回生となった勘右衛門は現在、飲み会からの帰路についていた。半ば背負った形になっている男は鉢屋三郎といい、同じ大学に通う同期生である。

出会ったのは二回生になったばかりの頃だった。同期に誘われ参加した飲み会でたまたま同じ卓に座ったのだ。つまり知り合ってまだ一年ほどしか経っていない。しかも学科どころか学部すら同じではなく、共通の趣味や話題もなかった。むしろ好みや興味はまったくと言っていいほど合わない。

にもかかわらず、勘右衛門は現在当然のように日々の多くの時間を彼と過ごしていた。こういう関係を馬が合うと言うのか、彼と共にいるのが不思議なほどにしっくりくるのだ。恐らく鉢屋も同じような感覚なのだろう、気がつけばどちらからともなく寄って行つては話をするようになり、不都合がない限りは行動を共にする間柄になっていたのである。

結果、今や勘右衛門は方々で鉢屋とセットのように扱われている。実際構内ではほぼ常に一緒にいるため当然といえは当然で扱ひ自体に不満はない。なんなら嬉しいくらいである。だが複数人で飲みに行く時ばかりは話が別だ。アルコール耐性が高くない癖に毎度懲りることなく酔いつぶれる鉢屋を連れて帰るのが、『セット』である勘右衛門の義務と化しているからだ。

飲み会は大抵大学近くの安い居酒屋で催され、鉢屋の家は大学の徒歩圏内にある。故に、連れ帰ること自体はそれほど苦ではない。

しかし鉢屋を送った頃には当然、終電の時間などとつぐに過ぎていく。勘右衛門は大学の五つほど先の駅が最寄りで、さすがに歩いて帰るのは無理だ。普通の大学生がタクシーをさせるはずもなく、選択肢は彼の家に泊まる一択となる。

鉢屋の住むマンションは大学生平均より綺麗で広い。また近頃は勘右衛門専用と化してきているが来客用の寝具も完備

されていて寝るに支障はなく、彼の介抱が終電を逃す理由である以上文句を言われる筋合いもない。……そもそも文句を言われたことなどないが。半ば強制的に介抱させられているのだから当然の権利である。

ならば何が問題なのか。至って単純、勘右衛門が個人的な事情で困るのだ。

ここだけの話、勘右衛門は鉢屋に恋愛感情を抱いている。しかも同性である彼に対して明確な肉欲も持っていた。

勘右衛門は同性愛者ではない。過去には彼女がいたこともあったし童貞も卒業済みだ。故に自分でも、どうしてこんなことになっているのか分からなかった。だが彼に対する欲を伴う情が存在していることだけは間違いない事実だった。

そんなこととは露知らず、彼は勘右衛門の前で堂々と泥酔するのだ。同性の友人という間柄からすればその態度に問題はない——いや泥酔すること自体が問題行動ではあるのだが。かつて勘右衛門が同性を好きになったことはなく、彼に想いを告げたこともないのだ。勘右衛門から恋愛感情を向けられている可能性に、鉢屋が思い至るわけがない。

つまり彼に責められるべき点など一つもなく、不満に思うこと自体が身勝手この上ない話なのだ。感情に出して実際にぶつけるなど、八つ当たり以外の何物でもない。そんなこと

は分かっている。だが意識して欲しい人にまったく意識されないというのは、なんとも惨めでつらいことだ。

そんな仕様もない不満を内心で悶々と捏ねているうちに、気がつけば勘右衛門は鉢屋のマンションに辿り付いていた。

勝手知ったる友の家、鉢屋の尻ポケットから鍵を拝借して室内に踏み入る。玄関で靴を脱がせた彼をほぼ引きずる格好で廊下を進み、居室の奥に鎮座したベッドまで来ると抱えた鉢屋ごとダイブした。加速度のついた男二人分の体重を受け止めたベッドが悲痛な悲鳴をあげたが、ようやく重労働から解放された勘右衛門に無生物を気遣う余裕はない。

深夜の静かな室内に、時計の秒針の音が小さく響いている。暫しその体勢のままくたばっていた勘右衛門は、身から重さが取れたところでようやく身を起こした。隣に転がる身体をおもむろに跨ぐと、膝立ちの体勢でその顔をじつと見つめる。鉢屋は、倒れ込んだ体勢のまま穏やかな寝息を立てていた。アルコールの影響の残る頬はほの赤い。常よりボタン一つ分大きく開いたシャツの襟首からはなめらかな稜線を描く鎖骨が覗き、醸し出される色気が勘右衛門を誘惑する。

——今夜こそ、やってしまおうか。

彼を見下ろし、勘右衛門は舌なめずりをした。好きな相手が隙だらけで目の前に転がっているのだ、年頃の健全な男で

あれば欲望が鎌首をもたげるのは自然なことだと思ふ。

男同士では尻を使ってセックスをすることを、勘右衛門は知っていた。鉢屋をオカズに抜ける自身に戸惑いを覚えなくなった頃、ネットで勉強したからだ。

鉢屋にも経験などないだろうが、誰でも最初は初心者だ。しつかり慣らしてやれば問題にはならないだろう。下心ありありの勘右衛門は日頃からローションもゴムも携帯しており装備は完璧である。明日は鉢屋も講義とバイトどちらも休みと聞いていて、翌日に響いたとて予定を狂わせることもない。なにより、泥酔した今の彼には自分が何をされているのかを正しく認識できないのだ。当然抵抗できるわけもなく、一方的に犯し既成事実(?)を作るのは容易いように思われた。脳内で卑劣な企みを構築していた勘右衛門はしかし、ふとその顔に浮かんでいたあくどい笑みを消した。真顔のまま、鉢屋の顔をぼんやりと眺める。

「今すぐ起きないと犯されちゃうぞー」
 ぼそりと、物騒な言葉を冗談っぽく呟く。だが彼は静かに寝息を立てているだけだ。勘右衛門は呆れ気味な笑みを薄く浮かべると緩慢な動作でベッドから降りた。動きに合わせてスプリングがぎしりと小さく音を立てる。

一方的に欲求を満たそうと考えたことなど、これまでに何度もあった。しかし鉢屋の安らかな寝顔を見るといつも、

よこしまで自己中心的な欲望などあつさり萎えてしまうのだ。据え膳もいいところである。

勘右衛門は如何ともしがたい欲求不満を二酸化炭素と共に荒く吐き出すと、鉢屋の方に掛け布団を乱暴に放り投げた。それが彼の腹の辺りに乗ったのを一瞥してから、雑に敷いた来客用の布団に潜り込んで眠りについた。

翌朝。そこそこの体調で目を覚ました勘右衛門は、適当に身支度を調べキッチンに移動した。冷蔵庫から失敬したハムをフライパンで焦がし、その上から卵を落とす。後から文句を言われても面倒なので二人分をまとめて焼き、鉢屋の分を皿に取りわける。自分の分は食パンに乗せてオープンサンドもどきにし、インスタントコーヒーで作ったカフェオレと共に卓上に並べた。

いただきますと手を合わせ、こぼさないよう気を付けつつパンにかぶりつく。ふかふかしたパンと香ばしいハム、濃厚な目玉焼きのハーモニーが絶妙だ。料理と呼べるようなものでもないが、十分美味しいそれについて自画自賛する。

勘右衛門が一人朝食を楽しんでいると、傍らのベッドからごそごそと物音がし始めた。やがて壁の方を向いていた鉢屋が寝返りの要領でこちらに顔を向けた。

「……あゝ、……頭、いてえ……」

「自業自得だ。ちゃんぼんすんなくていつも言ってるんだろ」
一言目にしかめつ面でぼやいた鉢屋に、勘右衛門は昨晩の（勝手な）恨みも込め素気なく返した。彼は眉間の皺を一層深くして、のろのろと額に手を添える。歪んだ彼の表情は、翳された手で遮られ勘右衛門からは見えなくなった。

「……昨日はビールしか飲んでない」

「嘘つけ、俺が頼んだ日本酒何回か持ってた。大体飲み過ぎなんだよ、あと酒と同じくらい水も飲めよな」

「飲んでるって」

誤認識をねちねち指摘し忠告すれば、鉢屋は不機嫌そうに口ごたえしてきた。反省の見えない彼に、勘右衛門は苛立ち混じりにため息をつく。

「てか毎回つぶれるとかさあ……、学習能力ねえのかよ」

重ねて苦言を呈すれば、鉢屋は頭を押さえたまま鬱陶しげに深く息を吐き出した。

「お前、俺の母親かよ……頭に響くから静かにしてくれ」

「誰が産むか！ こんな可愛げない息子なんぞ願い下げだ！」
不本意極まりないコメントを受け反射的に食ってかかった。だが冗談と口論で終わってはいつもと変わらない。考えを改めた勘右衛門は深く息を吸って気持ちを切り替える。

「心配して言ってるんだろ。もしつぶれてる時に誰かになんか

されでもしたらどーすんだよ」

親切心から忠告していることを強調し飲み方を改めるよう重ねて促した。——……今心当たりのある『誰か』は自分しかいないのだが、と心の中で自虐的な補足を付け足す。

「大丈夫だって、相手選んでやってるし」

「——……は？」

想定にない言葉を聞いた気がして思わず訊き返すと、鉢屋は額から手を離し顔を上げた。

「勘右衛門がいない時は自重してるから問題ない」

やや得意げにも見える真顔でごく当然そうに説明し直され、勘右衛門は継ぐべき言葉を見つけられずに呆けた。言い換えると、彼は『勘右衛門が一緒にいる時のみハメを外して酔いつぶれている』のだそうである。

「——……いや、むしろ問題しかないのだが。」

勘右衛門は内心で頭を抱えた。

どうやら彼は、勘右衛門に全幅の信頼を置いているらしい。

それは『勘右衛門に性的な目で見られている可能性』が彼の頭に欠片も存在していないことを示していた。今までも態度が雄弁に語ってはいいたのだが、言葉にされたのは初めてだ。信頼が、重くのしかかる。

勘右衛門にはもう、既成事実を作ることと正面から好意を伝えることもできなくなった。恋情を告げるのは彼の信頼に

背くことと同義だ。

そもそも同性から性的に見られていたと知った多くの人が示す反応は嫌悪だろう。鉢屋が寛容でそれほど悪化はしなかったとしても、気まづくなるのは確かだ。そして勘右衛門は、彼を裏切る勇気も関係を進めるために居心地のいい今を壊す覚悟も持ち合わせていないのだ。

裏切ることができないなら、すべてを諦め彼と距離を置く選択もあろう。だが希望のない現実にとれほど打ちのめされても、勘右衛門には鉢屋を放っておくことなどできないのだ。厚すぎるほどの信頼を得たこのポジションを誰かに譲るなどもつてのほかである。

だから勘右衛門は『鉢屋とセットの友人』で『酔いつぶれた彼の帰路の足』という立場に甘んじ続ける他ないのだ。

「お、今日はハムエッグにしたのか。美味そうだな、俺のものパンの上に載せてくれればよかったのに」

ようやく寢床から這いだした鉢屋が、卓上を眺めて勝手なことをのたまいながら洗面所へと姿を消した。

勘右衛門は思い出したように手元のパンを一口頬張り咀嚼する傍ら、取り出した食パンを鉢屋分のハムエッグの上に雑に載せた。それから大げさに音を立ててカフェオレを啜った。

「あれ、勘右衛門ひとり？ 珍しいな。鉢屋は？」

「今日はバイトだ」と

既に十回は訊かれただろう質問に、勘右衛門は面倒に思いながらも同じ答えを返してから手元のハイボールを煽った。

本日勘右衛門は一人で飲み会に参加していた。近頃の勘右衛門は誰かと酒を楽しむ空間を目的に飲み会に足を運ぶ傾向にあり、今日は誰かと飲みたい気分だった。

鉢屋は今答えたとおり不参加だ。セット扱いされているそれぞれ一人暮らしをしている身だ、単独行動している時間も普通にあるのだが。当初は訊かれる度くすぐったいような腹立たしいような妙な気分になっていたが、こうも繰り返して訊かれるとさすがにうんざりもしてくる。

「尾浜くん」

呼び声に、勘右衛門はまたかと思いつつも声の方へと顔を向けた。見れば、隣の席に一人の女の子が座ろうとしている。落ちかかると栗色の長い髪を耳に掛けながらこちらを覗き込むその顔に、見覚えがあるようなないような……。彼女の手にはサワーと思しきピンクの液体で満たされたグラスがある。

「唐突にごめんね？ ちょっとお願いがあつて……」

彼女はろくに挨拶もせず、席に着くなり用件を切り出した。甘えるような上目遣いに、なんとなく嫌な予感がする。

だが期待に瞳を輝かせ先を促されるのを待っている彼女が無視するわけにもいかず、勘右衛門は渋々ながらその心境が態度に出ないよう微笑を作った。

「——なに？」

「あたしの友達に、鉢屋くんが気になつてる子がいてね」

予感は見事的中した。勘右衛門は営業用の笑みを貼り付けたまま、耳から入ってくる言葉を方針気味に受け止める。

「尾浜くん鉢屋くんと仲良いでしょ？ 仲立ちして欲しいの」

彼女は相づちさえ打たない勘右衛門に頓着することなく、予想どおりの言葉を笑顔で紡ぎ続ける。勘右衛門はそれにも言葉を返すことなく、ただ自信に満ちている彼女の黒い瞳をぼんやりと見返した。

鉢屋との仲を取り持つ。初めて依頼されたことではあったが、考えてみれば別に驚くような話でもない。モテるといふほどではないが鉢屋もそれなりに女子に好かれる男なのだ。

平均よりやや高い身長、無駄な肉付きがない細身の身体。顔の作りはどちらかといえば整っている方で、清潔感のある装いが好印象だ。やや神経質でこだわりが強い面倒な側面も

あるが、頭がよく運動もそこそこできて愛想も悪くはない。勘右衛門としてそれなりに好意を寄せられた経験があるのだ。

鉢屋にそういう話がないわけがない。彼と『セット』である勘右衛門に、彼に想いを寄せる女子が相談を持ちかけてくるのは極めて自然な展開だと言えた。

「鉢屋くんにとつてもいい話よ。ほら見て、鉢屋くんの好みドンピシャの美人でしょ？」

得意げにスマートフォンを差し出した彼女に、当然そうに同意を求められる。勘右衛門は気が進まないながらも画面に目を向けつつ、思わず真顔になった。

(……——鉢屋の好み、知らねえわ……)

鉢屋との会話で色恋が話題に上がった記憶はない。日頃は授業や課題、でなければ世間話の一言で片が付くような取り留めもない話ばかりしていた。

ドンピシャだと断言するくらいなのだ、彼女には何らかの情報に基づいた確信があるのだろう。

改めて画面に意識を向ける。そこには柔らかそうな癖毛をゆるくまとめ、はにかんだように笑う女の子が映っていた。おっとりしていそうなその子が『鉢屋の好み』であるらしい。当たり前のことだが、勘右衛門とは似ても似つかない。

「すっごくいい子だし、あたしが言うのもなんだけど超優良物件だから♡ ねえ尾浜くん、お願い〜」

(そんなに仲良くもないのにすごいぐいぐい来るな……)

甘えるように腕を絡めてくる彼女に閉口する。

しかし勘右衛門は、抱いた悪感情を心中で黙殺した。それがままならない自分と鉢屋との関係に対する不満から生じていることに気がついたからだ。彼女の言動が自分への好意によるものだったならこれほど不快にならなかつただろうと、すんなり納得できてしまったのだ。この感情をぶつけることは、友人思いの彼女に八つ当たりするのと同じである。

故に勘右衛門は、絡みついた彼女の腕をそつと外しながら困ったように眉を下げた。

「つても俺、紹介するくらいしかできないけど」

「それで十分よ。だって鉢屋くん、今彼女いないでしょ？こんな可愛い子、断る理由ないじゃん！また後で連絡するから、その時はよろしくね♡」

前向きと言えなくもない勘右衛門の返答に、彼女はぱつと表情を明るくさせると言いたいことを言い意気揚々と去っていった。連絡先を訊かれなかつた点からして、記憶にはなかつたが面識のある子であつたらしい。

嵐が去つた後、一人取り残された勘右衛門は先ほど見せられた写真の子を思い浮かべた。

鉢屋の好みは知らないが確かに可愛らしい子ではあつた。

そして現在、鉢屋に彼女がいなくても確かである。なんせ勘右衛門は『セット』なのだ。おまけに好意を抱いてもいい。彼の周りにチラつく女の影に気がつかないはずがない。

飲み会の度に本人に思い知らされてきたのだ、自分に希望がないことなど嫌というほど理解している。しかしまさか、鉢屋と誰かを結びつける役目が回ってくるなんて思いもしなかつた。今までなかつたのが幸運だただけかもしれないが……いい加減諦めろという神様の啓示だろうか。

今まで鉢屋が彼女持ちだったことはもちろんあつた。だが当時は今ほどつるんではいなくなつたため、彼の恋人との接点自体がなかつた。勘右衛門が恋情を自覚していなかつたこともあり、その存在を強く意識することはなかつたのだ。

先刻声を掛けてきた子は紹介するだけでいいと言っていたが、あの調子のよさを鑑みると先々協力させられる可能性は否定できない。どちらにせよ鉢屋に彼女ができれば四六時中つるんではいられなくなる。そんな近い将来訪れるであろう日々を思うと憂鬱な気分が拭えなかつた。

気の重さのため息と共に吐き出した勘右衛門は、ささくれば己の心を誤魔化すように飲みかけのハイボールを煽つた。

ふと臉を開けると、目の前には見覚えのない天井があった。
 (えっ!? どこだここ!? ——つてえ!!)

驚いた勘右衛門は慌てて起き上がりとして、ひどい頭痛に襲われ布団に逆戻りした。かなりご無沙汰ではあったが、この痛みには覚えがある。二日酔いだ。

大学生になったばかりの頃、勘右衛門はいろいろな飲み会を渡り歩いてきた。酩酊感の気持ちよさに魅了されていたのはもちろんだが、成人のふりをして酒を飲む背徳感とスリルが癖になっていたからだ。……今となつては自分の糞ガキっぷりに恥じ入るばかりだが。また先輩についていくと奢つて貰えることも多く、万年金欠の大食漢には大変魅力的だった点も繁く足を運んでいた理由の一つだった。

当時はまだ自分がどのくらい酒を飲めるのかを把握できておらず、飲みすぎでは頭痛や吐き気に苦しめられていたものだった。だが経験を重ねる中で自身の酒量とペースを覚え、今では二日酔いとは無縁の健全な日々を送ることができるようになっていた——はずだったのだが。

事実、勘右衛門は今二日酔いに苛まれていた。何故そんなに飲んだのだったか……頭痛と戦いながら記憶を手繰る。

昨夜は一人で飲み会に参加して……そう、鉢屋と彼に恋心を抱いている女子との仲を取り持つよう頼まれてしまつ

たのだ。勘右衛門とて彼に叶わぬ恋をしているというのに。……誰も知り得ないことなので仕方ない話ではあるのだが。その後の記憶が曖昧なため、恐らくやさぐれた気持ちを誤魔化そうとしてつい飲みすぎた、といったところか。

ならばここは、参加者の内の誰かの家なのだろう。しかし昨日のメンバーで勘右衛門を連れて帰つてくれるほど親しくしている人はいなかったはずだ。ということは、多大な迷惑をかけてしまったことになる。

カーテンの隙間から差し込む光の強さから、既に昼近くになつていることが窺えた。迷惑な客でしかない勘右衛門は、平に謝罪して早々にお暇しなくてはならない。

再び頭痛に苛まれるのを避けるため慎重に上体を起こし、状況を把握すべく首を巡らせる。だが驚くべきことに、その室内には見覚えがあった。

「やつと起きたかのんだくれ」

不愉快な呼称に引っかけりを覚えつつも声のした方へ目をやれば、鉢屋がドアの前に立っていた。

そこは正真正銘、飲み会の度に泊まっている彼の家に相違なかった。天井に見覚えがなかったのは今までベッドに寝たことがなく、感覚が違っていただけだったらしい。

「なんだよ、のんだくれつて」

昨晩不参加だったはずの彼の家に何故今自分がいるのかという疑問は一旦脇に置き、不満も露わにオウム返しに食って掛かる。鉢屋は呆れたように片眉を跳ね上げた。

「そのまんまだけど？ 昨日酔いつぶれてた癖に。お前こそ酒癖悪いじゃないか」

やれやれと言わんばかりのその物言いは、普段の彼の行いからすれば理不尽なことの上ない。

「はあく？ 常習犯には言われたくないんですけど。ベッド占領して悪かったよ、すぐ退——……ヴ」

カチンときた勘右衛門は乱暴に上掛けを剥いでベットから降りようとした。が、突如自身を襲った鈍痛に呻いた。その痛みに心当たりが無すぎて思わずその場で硬直する。

頭も、地味にだがまだ確かに痛む。だが問題の鈍痛が生じた部位は尻だ。鈍い痛みに加えて何かが挟まっているような違和感がある。しかも剥いだ布団の下から現れた我が身は、どういうわけか下着すら身につけていなかった。

勘右衛門は上掛けを慌てて掛け直し股間を隠した。自身を取り巻く不可解な状況の数々に頭がついてこない。

「——な、……にがどうなって、こんな状況に……」

「へえ、訊くのか？ 分かっている癖に」

率直な疑問が口からこぼれ落ちる。すると思いのほか近から、含み笑いに続いて意地悪く応じる声が出た。いつの間

にか寄って来ていた鉢屋が、ベッドに片膝を乗り上げてくる。ぎし、とスプリングが軋む音が異様に大きく響いた。

彼の顔を見上げようとした勘右衛門はしかし、唐突に肩を押されて背中から転がった。上から覆い被さってくる鉢屋をただ目を白黒させて見上げる。

「——優しくしたつもりだったけど、やっぱ痛むか」

己を見下ろしたまま、鉢屋が独り言のように言葉を紡いだ。混乱の最中にある勘右衛門には、曖昧な表現から彼の発言の意図を汲むことができない。

「な、なにが……？」

気がつけば、おっかなびっくり尋ねていた。訊くべきではないとどこかで分かっていたのに、働かない頭を置き去りに口が勝手に問いを紡いってしまったのだ。一度発した言葉は取り消せない。勘右衛門は恐々として鉢屋を見上げた。

問いかけに、彼はまずきょんと小首を傾げた。それからつつりという擬音が聞こえそうなほどわざとらしい笑みを浮かべる。勘右衛門の背筋を、ぞわりと悪寒が走った。

「喜んでいいぞ、期待どおりのことがあったから」

「——……は？」

「朝起きたら、ベッドに全裸で寝ててケツが痛い。部屋には男が二人だけ。……他に説明が？」

現状を流れるように述べられ、勘右衛門は言葉を失った。